様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：４２６８１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１１７２９

研究課題名（和文）小児外来看護実践能力向上のためのeラーニングを活用した学習支援ガイドの作成

研究課題名（英文）Preparation of learning support guide utilizing e-learning for improving outpatient nursing practical skills

研究代表者
及川　郁子（OIKAWA, Ikuko）

東京家政大学短期大学部・短期大学部・教授

研究者番号：９０１８５１７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、eラーニング教材（「子どもと家族のそばに行こう」「母子健康手帳を活用しよう」「予防接種を知ろう」「トリアージを行ってみよう」「外来での事故を防止しよう」「外来での倫理的課題を考えよう」）を用い、eラーニングで得た知識や技術を実践に活用するための学習支援について検討することである。学会でのワークショップとグループによる3回の継続的学習会の2つの方法で調査をした。
3回のワークショップの開催(105名の参加)、8グループによる医療機関での学習会による取り組み（40名参加）の結果、業務改善や仕事意欲などに好影響があることが示され、学習支援ガイド作成のための資料を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study is to examine learning support to utilize the knowledge and technology obtained by e-learning by using e-learning ("Let 's cuddle with child and family"" Let 's use the maternal and child health handbook "" Let' s understand the vaccination "" Let 's prevent accidents at outpatient "" Let ’s think of ethics problems at outpatient ") teaching materials for practical use. We conducted a survey in two ways: workshop at academic meeting and three continuous learning sessions by group.We held three workshops (participation of 105 people) and eight groups of learning sessions at medical institutions (participation of 40 people) . As a result, it was shown that there is a positive influence on business improvement and job motivation, etc., and clues for creating learning support guide were able to be obtained.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児看護　外来看護師　eラーニング　継続教育　学習支援

１．研究開始当初の背景

医療・社会状況の変化から、小児看護領域においても外来看護の重要性が言われてきている。外来が機能変化し、慢性疾患や医療的ケアを受けながら地域で生活する子どもたちも増えており、外来や診療所での子どもや家族のニーズは複雑・多様化している。多くの子どもたちの受診内容は、一般的疾病（Common Disease)、健康診断や予防接種などであるが、子どもたちの健康教育にも密接に関わるものである。そして、慢性疾患や医療的ケアのある子どもたちも含め、子どもの日常的な健康管理を支える地域医療の充実が不可欠となっている。しかし、小児外来に勤務する看護職への調査においては、時間的余裕のなさや人員不足のために日常診療の中で十分な看護支援を行えていない状況にあった[1, 2]。

そこで、研究者らは、小児看護を実践する外来看護師に必要な能力と育成のための支援プログラムの開発に取り組み、e ラーニングによる 6 つの教材（「子どもと家族のそばに行こう」「母子健康手帳を活用しよう」「予防接種を知ろう」「トリアージを行ってみよう」「外来での事故を防止しよう」「外来での倫理的課題を考えよう」）を作成し[3]視聴評価を行った。その結果、個別視聴による学習参加や効果への期待はあるものの、具体的な実践への結びつきが課題であった[4]。

２．研究の目的

これまでに作成した６つのｅラーニング教材を用いて事前学習後、グループによる継続的な学習会を実施し、e ラーニングで得た知識や技術を実践に効果的に活用するための学習支援を検討し、学習支援ガイド作成のための資料を得ることを目的とした。

３．研究の方法

研究方法は２つの方法で実施した。

（１）　学会ワークショップを活用した学習会の開催

① 対象：毎年開催される日本外来小児科学会年次集会ワークショップに申し込み、学会に参加する看護職や事務職 40 名を募集した。

②方法：事前学習としてｅラーニング教材「外来での事故を防止しよう」を視聴する。2015 年・2016 年は、各施設での事故に関する課題を出し合い、解決に向けた方策について危険予知トレーニング（KYT）を活用して話し合うこととした。2017 年の 3 回目は、各施設でリーダーとなって『事故防止対策のための勉強会を開く』ことができる研修会とした。

（２）医療機関での継続学習会の実施

① 研究参加者（対象者）：一般総合病院や大学病院の外来において子どもと関わる外来看護師 各医療機関 5 名程度。および、学習会に参加する外来看護師の上司で、各医療機関 1～数名。上司は、学習会には参加しない。

②　学習内容

ｱ. 6 つのｅラーニング教材から１つの教材を選択し、継続学習会の内容（以下、「プログラム」という）とする。

ｲ. 選択したプログラムについて、事前に e ラーニング学習（個別）を行った後、3 回の学習会（話しあい）を１ヶ月程度の間隔で実施する。1 回の学習会の時間は、60～90 分とする。e ラーニングの事前学習は、知識を得ること（または、再確認すること）を目的に、知識確認テストを実施し、80%以上を合格の目安とした。

ｳ. 学習会では、職場ごと、または参加者個人で取り組み課題を設定する。学習・課題内容や取り組み状況をワークシートに記載し、話し合いを行う。

ｴ. 学習会にはファシリテーターが付き、学習会の司会・進行を行う。

③　調査内容

ｱ.　外来看護師には、学習開始前のアンケート（属性や参加動機）、学習会後のアンケート（参加意識や満足度）、学習会ごとに指定

されたワークシートの記載を求めた。
ｲ. 上司は、学習会終了後にアンケート（外来看護師の意識や外来看護への影響など）を実施した。
ｳ. ファイシリテーは、外来看護師の学習状況や問題、ニーズなどを把握し、学習会ごとに評価表に記録した。

（３）倫理的配慮：研究の実施に当たっては、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に則り、研究者の所属する研究倫理審査ならびに必要時実施施設の研究倫理審査後に研究を実施した。

４．研究成果
（１）学会ワークショップを活用した学習会
① 2015 年・2016 年のワークショップ：看護職、事務職、保育士など平均 36 名の参加があった。各医療機関での現状や課題として、親が携帯に夢中で子どもを見ていないなど、外来受診での親の問題が多く取り上げられた。そのような状況に対する医療機関の取り組みとしては、親への意識付けのためには日頃から親とコミュニケーションをとり関係性を良くしておくことや、掲示物を貼る、安全道具の活用など、スタッフの意識付けやさまざまな工夫、防止策の必要性が話し合われた。参加者の評価では、10 点中 8.94 で、満足度が高かった。e ラーニング視聴による事前学習は役立ち、解決に向けた話し合いでたくさんのヒントを得ることができたなどの意見が多く記載されていた。
② 2017 年度のワークショップ：各職場でリーダーとなって『事故防止対策の勉強会を開く』ことを目的とした研修型ワークショップには、看護職、事務職 33 名が参加した。グループごとに事故が起きやすい状況を分析した後、企画書作成を行った。『スタッフの事故防止への意識を高める』『転倒転落防止』『予防接種時の誤接種防止』などがテーマに取り上げられ、30 分～60 分間の企画案を作成した。企画書作成の経験が初めての参加者が多かったため、職場で事故防止の企画・運営を実践し、その結果を返信いただくよう依頼した。その結果、15 名の施設から実施の回答があった。職場の状況に応じて創意工夫して取り組んだこと、スタッフの意識付けに繋がったことなどの評価が記載されていた。

（２）医療機関での継続学習会の実施
① 参加者の背景：学習会への参加者は 40 名で、全過程を終了した者は 39 名であった。看護師経験年数は 1～39 年（平均 17 年）で、小児看護経験年数は 0～20 年（平均 5.7 年）で 5 年未満が 24 名で 6 割を占めていた。参加者の勤務場所は小児科外来が最も多いが、小児科以外の診療科からの参加もあった。参加動機として、『知識を深めるため』が最も多く、次いで『日常の看護に活かすため』『小児看護の経験が少ないため』などであった。
② 実施プログラムとその効果：8 医療機関 8 グループによる学習会を開催した。「子どもと家族のそばに行こう」「母子健康手帳を活用しよう」「外来での事故を防止しよう」が各 1 グループ、「トリアージを行ってみよう」2 グループ、「予防接種を知ろう」3 グループであった。

学習会に参加後の変化として、知識が深まり、取り組み対する意識が高まったとしているが、実際に課題に取り組んだ人は 30 名であった。取り組むことができなかった理由として、『子どもに関わる機会がなかった』『業務に追われてしまった』などが挙げられていた。また、e ラ―ニングによる事前学習は、知識教授を目的とした方法として、『いつでもどこでも何度でも学習することができ身につきやすい』『今まで意識していなことがわかった』など、満足度が高く適切な方法であった。

3 回に渡る継続学習会も、『他のスタッフや診療科の取り組みや考え方を聞くことで新

たな気づきがあった』『自分たちが行っていることを客観的に伝えてもらい気づきにつながった』『次回の課題があり勤務で実践したことを皆で振り返り共有することができた』など、有意義であったと感じていた。また、学習会を通してマニュアルを作成したグループもあり、各職場の状況にあった課題を検討し、実践に結びつけることができる効果的な方法であった。

上司からの回答は 9 名で、7 名が師長であった。参加者の知識、意識ともに変化があったとしているが、外来への影響としては『変わりない』と回答したものが 2 名いた。

③ プログラムごとの取り組み状況

「子どもや家族のそばに行こう」では、『患者情報メモやサマリーを活用することで情報交換の機会が増えた』と評価していた。「母子健康手帳を活用しよう」では、小児科以外の診療科でも受診時に母子健康手帳を確認することの意義をあらためて意識することや、母子健康手帳への記録を保護者に促すなどの働きかけを行っていた。「外来での事故を防止しよう」では、この取り組みを通して『事故防止マニュアルを見なおし』、外来全体への周知徹底を図っていた。これら 3 つのプログラムは各 1 グループだけの取り組みであったが、それぞれの外来や参加者の実情に応じた具体的な取り組みが行われていた。

「トリアージを行ってみよう」は、2 グループが取り組んだ。事前課題として『トリアージの精度を上げること』『トリアージ教育の不足』『トリアージ基準の作成』などが挙げられ、学習会を重ねるに従い、『トリアージ行動の変化』『トリアージの改善』『他職種との協働など』の変化が見られ、実践活用への評価が高かった。

「予防接種を知ろう」は、3 グループが取り組んだ。事前課題として、『接種人数が多くなると業務が煩雑化し事故などの危険が起こるため、業務の分担を明確にする』『予防接種について不安や理解不足のある子どもや保護者への教育的関わりについて検討する』『予防接種の電話問い合わせに速やかに対応できる問い合わせファイルをつくる』など、具体的な取り組みが挙げられた。学習会を通して、事前課題として取り上げたことが達成でき、新たな課題をも見出していた。

（3） 学習支援ガイドの作成に向けて

本研究は、2 つの学習会を通して e ラーニングを活用した事前学習とその後の継続学習会の評価を行った。その結果、学習支援ガイドを作成するに当たり、以下の点を考慮した支援ガイドの作成を検討する必要がある。

① 5 つの e ラーニング教材は、事前学習の手段として取り入れることで、自分たちの知識や職場の状況を見直す機会となっていた。個別学習ではあるが、プログラム内容を意識することで、実践への取り組みへの導入として活用できることが明らかになった。e ラーニングは、何度も見直しが出来るだけでなく、合格を 80%以上に設定したことで、一定の知識の元に学習会を開催できたことも要因であったと考える。今回は e ラーニング視聴を ID・パスワードで管理していたが、学習者が簡便に視聴できる方法の検討が必要である。e ラーニングによる学習目的を明確に提示し、学習者のニーズに合わせた活用方法を検討することで、継続学習の意味が大きくなると考える。

② 3 回に渡る継続学習は、自らの課題を明確にし、次までに目標を定めて取り組むなど、短期的・実践的な方法として効果があった。特に、すでに経験はあるが職場改善をしたい、もっと良いケアを探りたいと考えている中堅スタッフにとって良い方法であった[5)]。今回は、学習会ごとにワークシートの記載を求めたが、A41 枚程度で自由に記載できるようにしたことも記録の負担を少なくしている。また記載することで振り返りができ、次への

動機付けになったものと考える。負担少なく、効率的・効果的に実践に繋げる学習会の持ち方を、各職場のスタッフの背景等を参考に検討することが必要であろう。

③ 学習会では、1名のファシリテーターが司会・進行を行った。プログラム参加者と直接関係無いものがファシリテーターに入ったことで、業務評価と関係ない利点もあったと考える。しかし、ファシリテーターの評価までは行っていないため、今後の学習会に向けては、ファシリテーターの位置づけ、役割、適任者など、検討が課題となる。

④ 今回5つのeラーニング教材を活用して継続学習会の評価をおこなうことができたが、「外来での倫理的課題を考えよう」を取り上げたグループは無かった。倫理的課題は重要なテーマであるが、直接的な結果や結論を導くにくい領域でもあり、継続学習会の持ち方など更なる検討が必要である。

＜引用文献＞

１）簗瀬順子ほか、外来看護管理者の小児科外来看護師への教育支援の認識と現状、日本小児看護学会第23回学術集会講演集、2013、p211.

２）古屋千晶ほか、外来看護師の小児看護に関する継続教育の認識、日本小児看護学会第23回学術集会講演集、2013、p212.

３）及川郁子ほか、小児看護における外来看護師育成支援プログラムの開発～e ラーニング学習プログラムの紹介～、2014年度文部科学省研究費補助金基盤研究B報告書、2015.

４）及川郁子ほか、e ラーニング学習教材による外来看護師への教育支援の検討、日本小児看護学会第 25 回学術集会講演集、2015、p278.

５）秋山朋子ほか、中堅看護師の継続教育の現状と課題、日農医誌、65(2)、2016、p282.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①及川郁子、外来での事故防止を進めよう～事故防止対策の企画・運営を学んでみませんか～、外来小児科、査読なし、20巻4号、2017、484-485.

②及川郁子、外来での事故防止を学ぼう(2)、外来小児科、査読なし、19 巻 4 号、2016、491-492.

③及川郁子、外来での事故防止を学ぼう、外来小児科、査読なし、18巻4号、2015、482-483.

〔学会発表〕（計３件）

①菅原淳、古屋千晶、川口千鶴、及川郁子他7 名、小児外来看護実践能力向上のための継続的な学習会の効果、日本小児看護学会第28回学術集会、2018.

②佐々木祥子、石井由美、及川郁子、川口千鶴ほか7名、子どもにかかわる外来看護師のトリアージ関する継続的な学習会の効果の検討、日本小児看護学会第 28 回学術集会、2018.

③簗瀬順子、黒田光恵、吉川佳孝、朝野春美、及川郁子、川口千鶴ほか5名、子どもにかかわる外来看護師の予防接種関する継続的な学習会の効果の検討、日本小児看護学会第28回学術集会、2018.

〔その他〕

ホームページ等

http://slcn.jpn.org/login/index.php

(タイトル：Child Health Nursing)ホームページは学習教材として動画等を掲載しているため内容の公開は行っていない。

６．研究組織

(1)研究代表者

及川　郁子（OIKAWA,Ikuko）

東京家政大学・短期大学部・教授

研究者番号：90185174

(2)研究分担者

川口　千鶴（KAWAGUCHI,Chizuru）

順天堂大学・保健看護学部・教授

研究者番号：30119375

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者

朝野　春美　（ASANO,Harumi）

石井　由美　（ISHII,Yumi）

吉川　佳孝　（KIKKAWA,Yoshitaka）

黒田　光恵　（KURODA,Mitue）

佐々木　祥子（SASAKI,Shouko）

菅原　淳　（SUGAWARA,Jun）

橋爪　永子　（HASHIZUME,Eiko）

古屋　千晶　（FURUYA,Chiaki）

簗瀬　順子　（YANASE,Junko）

山本　美佐子（YAMAMOTO,Misako）